九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

分詞句について

廣江, 顕
九州大学大学院文学研究科 : 修士課程

https://doi.org/10.15017/6789505

出版情報：九大英文学. 38, pp.165-175, 1995. The Society of English Literature and Linguistics, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

分詞句について

廣　江　　顕

0．序

生成文法の発展とともに、その理論は、英語を基盤として、言語に関するさまざまな現象に対する研究領域を生み、同時にその射程を拡大してきたと言える。そうした反面、あまり研究対象として目を向けられることのなかった分野に「分詞句」がある。一見、(1)に見られるように、動名詞と極めて類似しているため、動名詞と並行して論じられることがおおかった。

(1) a. *Seeing the police officer*, he ran away.
　　b. I remember *seeing the police officer* before.

しかし、両者の間には大きな違いがある。分詞句は、文中の独立した位置（ absolute position ）、つまり、A'位置に生じており、一方、動名詞は、名詞の生じる位置、つまり、A位置に生じている。本稿では、以下、A'位置に生じる「分詞句」に関する二つの問題について考察する。一つは、分詞句は「分詞構文」という、一種の「構文」[1] として認められることがおおいが、「構文」と主張する場合に生じる問題点を指摘する。もう一つは、分詞句は文頭・文中・文末のいずれの位置にも現われるが、文末に現われた場合に、その機能が文頭・文中とは異なることを指摘する。

1. 分詞構文は「構文」か

この章では、従来、分詞句がその構成素からは意味が引き出せない、いわゆる、「構文」と仮定されてきた主張の問題点について論じる。

(1) a. Standing beside him, Benedict pointed to Sanders's phone.
(Michael Crichton, *Disclosure*)
b. When Benedict was standing beside him, Benedict pointed to Sanders's phone.
(2) a. Complaining of a bad headache, he went straight to bed when he got home.
b. As he was complaining of a bad headache, he went straight to bed when he got home.
(3) a. The dog, properly trained, will be a faithful servant.
b. The dog, if it is properly trained, will be a faithful servant.
(4) a. Being slow of speech, he enjoys conversation.
b. Though he is slow of speech, he enjoys conversation.

まず、(1a-4a)は(1b-4b)とほぼ同じ解釈になることから、ここで、それぞれ(a)は(b)から派生して出来た構造であると仮定してみよう。すると、それぞれ、(b)から(a)の構造を派生させるためには、(b)から接続詞、主語、be 動詞を削除することが必要となる。しかし、(5)のような例があることから、その主張には不備があることが分かる。

(5) a. Not knowing anything about computers, I am poor with them.
b. *As I am not knowing anything about computers, I am poor with them.

つまり、(5b)が容認不可能であることから、この派生は認められないことになる。では、形の分析ではなく、意味の分析から分詞句の派生を考えてみよう。たとえば 、Williams (1975)は、分詞句と非制限的関係節の意味の違いを、次のように分析している。

(6) a. May believed that John, driving down the street, saw a jackrabbit.
b. May believed that John, who was driving down the street, saw a jackrabbit.

(Williams 1975: 22・23)

(6a)では、「John が車で通りを下っていることは、May の信念の一部」だが、一方(6b)では、「かならずしもそうではない」。したがって、Williams も言う通り、(6b)から(6a)の分詞句を派生させることは出来ない。すると、(1a-4a)のような分詞句は、そのままの形で基底生成されているということになり、ここでの議論とは逆、言い換えれば、一見、分詞句は「構文」であるという主張をしているようだが、そうではない。つまり、そのままの形で基底生成された(1a-4a)のような分詞句と類似した現象の存在を証明できれば、それは「構文」ではないという強い主張になると思われる。

Williams も示す通り、分詞句は文中の独立した位置に現われた場合、副詞句としてのはたらきがあるようである。Williams は adverbial particles と呼んでいる。そうしたはたらきを分詞句で担っているのは、-ing 以外には考えにくい。そこで、その -ing と類似した現象があるかどうかを調べてみることにする。

まず、分詞句がA'位置に現われる場合、なぜそうした位置に生じるかは、-ing はIという機能範疇であり、分詞句はその -ing の素性（仮に［＋F］と呼ぶことにする）が句構造に投射された結果生じると考えられるからである。[2] ここでは、同様の現象が語レベルで起っていると考えられるものを考察してみることにする。

(7) a. I have a daughter that I love *passing* well.

b. it rain'd *exceeding* hard.

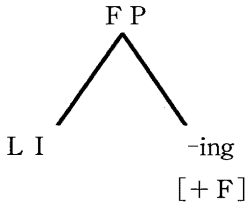
c. Though the day was wet, *dripping* wet.

d. the six pense ... having become so *reeking* hot in the tight squeeze of his excited hand ...

(Otsuka *et al*. 1979)

(7)で観察されるように、それぞれ passing、exceeding、dripping、reeking は付加部(副詞)としての解釈しかない。ということは、-ing の素性[＋F]が、(8)に示すように、その語の素性を決定していると考えられる。(ＬＩは語彙範疇、ＦＰは -ing が投射して出来た句構造を示す。)

(8)



こう考えると、次の(9)においても、busy と a stranger の前に being が省略されていると考えざるをえない。

(9) a. (being) Busy with his work, he can find no time for reading.

b. (being) A stranger to poverty all his life, he has an optimistic view of life.

つまり、(9)において、仮に -ing が存在しないとすると、-ing がもつ素性[＋F] が投射されないことになり、(10)に見られる解釈は生じないことになってしまう。

(10) a. As he is busy with his work, he can find no time for reading.

b. As he is a stranger to poverty all his life, he has an optimistic view of life.

結論として、分詞句に見られる -ing の振舞いは、分詞句特有の現象ではなく、他にも同様の現象があることが示された。したがって、分詞句のはたらきを「構文」と断定することには問題があることになる。さらに、本来、「構文」は意味と形がきまっているものだが、第3章で言及するように、分詞句が文中のいずれの位置にも生起し、その位置によって機能が異なるという事実も、分詞句を「構文」として認める際の問題点になりうると思われる。

2. 従属接続詞を伴う分詞句

分詞句には、(11)に観察されるように、従属接続詞を伴うものがある。

(11) a. When using the scissors, the little girl cut her finger.

b. As lost in thought, I did not notice her.

まず、(11)の従属接続詞を伴う分詞句の表示は、一般に(12)のように示される。

(12) a. $[_{CP}\ [_{C}\ \text{When}]\ [_{FP}\ [_{I}\ \text{-ing}]\ [_{VP}\ \text{use the scissors}]]]$

b. $[_{CP}\ [_{C}\ \text{As}]\ [_{FP}\ [_{I}\ \text{-ing}]\ [_{VP}\ \text{be lost in thought}]]]$

前節でも触れたように、分詞句は、-ing のもつ素性［＋F］がその句構造に投射された結果生じているものだが、(12)に見られるように、-ing とVPが結びついた時点でその投射は終わっているはずである。なぜなら、FPとなった時点で、A'位置にある分詞句としての固有の特徴は示せるからである。その証拠として、C_0 の位置にある when や as がなくても、その解釈は(13)

で観察されるように同じである。

(13)a. Using the scissors, the little girl cut her finger.
　　b. Lost in thought, I did not notice her.

それでは、主格独立構文(nominative absolute constructions)と呼ばれるものの構造はどうであろうか。

(14)a. His salary being what it is now, I won't marry him.
　　b. Night coming on, the wind abated.

この場合、分詞句の主語になっている his salary と night は、ＦＰ（＝ＩＰ）の指定辞の位置に入る。しかし、従属接続詞が無い場合、(15)のような解釈をどうやって生じさせるかという問題が残る。

(15)a. If his salary is what it is now, I won't marry him.
　　b. When night came on, the wind abated.

その問題には、次のような構造を仮定すれば解決出来る。(14)の構造では、C_0 は無形だから、ＣＰの指定辞の位置に Operator (演算子) があり、それが主節との相互作用によって when や as などの解釈を導き出すと考えればよい。

(16)a. $[_{CP}$ OP $[_{C}]$ $[_{FP}$ he $[_{I}$ -ing $]$ $[_{VP}$ be a ・・・ $]]]$
　　b. $[_{CP}$ OP $[_{C}]$ $[_{FP}$ night $[_{I}$ -ing $]$ $[_{VP}$ come on $]]]$

3． 分詞句の位置

この章では、分詞句が現われる位置に応じて、その機能が異なることを議論する。分詞句は、(17)で見られるように、文頭・文中・文尾、いずれの位置

にも現われうる。

(17)a. Speaking at a forum on the Pacific War, Theodore McNelly presented this analysis based on documents and interviews with U.S.intelligence sources, ...

(*Mainichi Daily News*)

b. The company, building on a powerful domestic base, is already a behemoth.

(*Time*)

c. She stepped out, reaching out for a towel.

(Michael Crichton, *Disclosure*)

これまで、分詞句が文頭・文中・文末のいずれの位置に現われても、一律に付加部、すなわち、ＶＰ adverbs と仮定されてきたが、かならずしもそうではない。

(18)a. Theodore McNelly, speaking at a forum on the Pacific War, presented ...

b. Building on a powerful domestic base, the company is already a behemoth.

(18)では、(17a)の文頭に現われた分詞句を文中に、(17b)の文中に現われた分詞句を文頭に移動させている。(18)で観察されるように、そのように入れ換えても容認可能であるということは、文頭の分詞句と文中の分詞句の機能は同一だと判断出来るようである。ここでは、いずれも ＶＰ Adverbs になっている。では、文末の位置にもってきた場合はどうであろうか。

(20)a. *Theodore McNelly presented this ... , speaking at a forum on ...

b. *The company is already a behemoth, building on a powerful

domestic base.

(20)が容認不可能であるということは、文末の位置に現われる分詞句の機能が、文頭・文中とは異なることを示している。それでは、これから文末の位置に現われる分詞句の機能を調べてみよう。

文末の位置に現われるタイプの分詞句は、(21)で観察されるように、接続詞を用いて書き換えることが可能である。

(21)a. She swung her foot, kicking at it.
b. She swung her foot, and kicked at it.

(21a)が(21b)のように書き換えられるということは、(21b)の kicking at it は VP を修飾する副詞的な機能をもっているのではなく、She swung her foot の箇所と同様に「assert」[3] されていると判断することが出来る。したがって、(21a)では、kicking at it を 前置することは許されないし、

(22) *Kicking at it, she swung her foot.

文中の位置にもってくることも、同様に許されない。

(23) *She, kicking at it, swung her foot.

こうした観察を通して、文末の位置に現われる分詞句は主節現象を示すこともある、ということが言えるようである。[4]

(24)a. Gripping the phone, she said, "There was a recurrent nightmare she's had over the years."
(Mary Higgins Clark, *All Around The Town*)
b. It is not difficult, knowing Hawthorne, to guess which will serve as heroine.

分詞句が文頭・文中に現われている場合は、(24)で観察されるように、後続の、あるいは、その分詞句を除いた節の前提（背景）になっているようである。この分析は、(24)がそれぞれ(25)のように書き換えられることからも分かる。

(25)a. When (While) she was gripping the phone, she said, "There was ..."

b. It is not difficult, if you know Hawthorne, to guess which ...

したがって、前提になっている分詞句を、主節現象を示す可能性のある位置へは移動させることは出来ない。

さらに、文末の位置に現われる分詞句が主節現象を示す可能性があることを裏付ける事実がある。

(26) *Did she swing her foot(?), kicking at it.

(26)で、 kicking at it が主節現象を示さない、つまり、文頭・文中の分詞句と同じ VPadverbs だとすると、(21a)を疑問文にした場合、kicking at it も意味的に疑問の対象に含まれるはずだが、かならずしもそうではない。ということは、kicking at it という分詞句は、she swung her foot とは意味的に独立している、つまり、「 assert 」されているのである。

またさらに、こうした説明を裏付ける事実がある。これまでの考察で、文頭・文中に現われる分詞句は、後続、あるいは、それを除いた節の前提（背景）になっていることを見てきた。ということは、分詞句が前提になっている場合、従属接続詞を用いた書き換えから分かるように、その前提は一つである。したがって、文頭・文中の位置に二度以上分詞句が現われないことが予測される。実際、(27)で見られるように、その予測は正しい。

(27)a. *Speaking at a forum on the Pacific War, feeling nervous

with a grave face, Theodore McNelly presented this ...

b. *The company is, building on a powerful domestic base, opening up a new market, already a behemoth.

一方、文末に現われる分詞句は、そのような制限がないことから、繰り返し生起することが可能である。

(28)a. I was home from college, living with my parents for the first time in four years, trying to observe them with the coolness of the adult I took myself to be.

(Jared Taylor, *The Tyranny of the New and Other Essays*)

b. Pilar Graham, as she still called herself professionally, sat in her offce, staring at a file on her desk, making notes to herself, when ...

(Danielle Steel, *Mixed Blessings*)

4. 結び

分詞句は、従来、「分詞構文」、いわゆる「構文」として認められてきた。しかし、実際には、「構文」としての意味を決定する -ing の特徴は他の現象にも観察されうることから、一概に「構文」と定義するには問題がいくつかあることを見てきた。それと、分詞句の機能に関しては、文頭・文中と文末によってそのはたらきが異なることから、その機能と統語的なはたらきが一致しない興味深い現象でもある。

註

＊本稿を執筆するにあたり、インフォーマントとして御協力くださった D.Taylor 先生に感謝の意を表したい。

1.「構文」という用語は、Goldberg (1992) に従っている。ただし、Goldberg 自身は「分

詞構文」を扱ってはいない。

2. この主張の詳細については、稿を改めて論じることにする。

3. この「 assert 」という用語については、Hooper and Thompson (1973) の議論を参照されたい。本論で述べた「主節現象」に関わる制限としては、Green (1976) では、「語用論的に、内容を主張する(assert the content)」と、Lakoff (1987) では、「陳述を伝える (convey statement)」と、それぞれ主張している。ただし、Green は埋め込み節における主節現象の問題について論じている。

4. 文末に現われる分詞句でも、VP-adverbs になるもの、あるいは曖昧な解釈しかできないものもある。

(i)a. He drove his car, whistling merrily.

b. She went into the bathroom, slamming the door behind her.

(Michael Crichton, *Disclosure*)

参考文献

Chomsky, N. 1981. *Lectures on Government and Binding*, Foris, Dordrecht.

Chomsky, N. 1986b. *Barriers*, MIT Press, Cambridge, MA.

Emonds, J. 1971. *Root and Structure-Preserving Transformations*, Ph,D. diss., MIT, Cambridge.

Goldberg, A. E. 1992. *Argument Structure Constructions*. Ph.D.diss., University of California at Berkeley.

Green, G. 1976. "Main Clause Phenomena in Subordinate Clauses." *Language* 52, no. 2, 382-97.

Hopper,J., and S.A. Thompson, 1973. "On the Applicability of Root Transformations." *Linguistic Inquiry* 4: 465-98.

Ishihara, R. L. 1982. *A Study of Absolute Phrases in English within the Government Binding Framework*. Ph.D.diss., University of California, San Diego.

Lakoff, G. 1987. *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*, University of Chicago Press, Chicago.

Otsuka *et al*. 1979. The Kenkyusha English Grammar Series II, Tokyo, pp. 1647-1734.

Pollock, J.-Y. 1989, "Verb movement, universal grammar, and the structure of IP," *Linguistic Inquiry* 20: 365-424.

Stowell, T. 1981, *Origins of Phrase Structure*. Unpublished MIT Ph.D. dissertation.